乳幼児の発達

ー「人間関係の保育」の授業実践ー

高橋　千枝

キーワード：発達，保育，幼児教育，人間関係

Ⅰ．はじめに

１．発達心理学的視点から捉える乳幼児

私の専門は発達心理学である。特に幼児期の仲間関係の発達や集団活動をとおしての社会性の発達に関心を持っている。

授業では「人間関係の保育」（１年次後期）等をとおして、幼児期の仲間関係や社会性に関する文献や論文を読みながら、人との関わりの重要性を考える。発達を捉える際には「人は生涯発達し続ける」ということが重要な視点となる。人間の発達は連続的なものである。昨日の自分と今日の自分が全く異なるということは、通常あまり起こることではない。幼児期の発達の先に成人期があるとすれば、幼児期の発達を捉え、適切な支援をすることはとても重要であるといえよう。しかしそれは「乳幼児期に知識を詰め込む」ということや「早く大人になるため」ということではなく、子ども時代にいかに子どもらしさを保障できるかということである。例えば、子どもたちは友達と関わることをとおして意図や思いを共有することの楽しさを学び、集団内における決まりの理解や役割分担といったことも学ぶ。さらに葛藤や妥協といったこともこの時期に学ぶ、したがって友だちとのトラブルでさえも幼児期にとっては重要な課題だと考える。幼児期に様々なことを経験することによって、子ども達は豊かな情緒や思考を獲得することができる。幼児期の発達を研究し、そして支援していくということはとても意味のあることだと私は考える。

また子ども達は幼稚園や保育所といった集団活動の場で家庭では学ぶことの出来ない様々なことを学ぶことになる。それは子ども同士の関わりだけではなく、親ではない大人との関わり、つまり保育者との関係も含まれる。したがって幼児期を中心に考えながらも、幼児を取り巻く大人としての保育者への支援についても考える。

２．これからの保育および幼児教育

平成 20 年に保育所保育指針および幼稚園教育要領が改定された。とりわけ保育所保育指針は告示化され、今までのようなガイドラインではなく、法的拘束力をもつこととなった。以下に保育所保育指針の主な改定内容をあげる。

１．告示化
２．大綱化
３．保育課程の作成（大綱化と関連し特色のある保育）
４．保育士の質的向上
５．保護者支援
６．小学校との連携

保育所保育指針の改定された内容をまとめてみると、これまで以上に質の高い保育が求められており、加えて保育を系統だてて行うことが強調されている。こうしたことに加えて最近では認定こども園といった今までにない保育・幼児教育制度も開始された。そしてますます養護と教育の一体化、さらには地域との連携の必要性が問われるようになった。以上のように保育・幼児教育および子育て支援制度が目まぐるしく変動している今日、本稿では１年次後期に開講されている「人間関係の保育」の枠組みから、乳幼児期の発達を改めて論じてみたい。そして、今我々に求められているものは何かということを考えてみたい。その際「人間関係の保育」の授業でも参考資料として使用した「発達心理学　保育・教育に活かす子どもの理解」（建帛社，2007）を参考に論ずる。

Ⅱ．乳児期の発達

初回の授業からしばらくは乳児および幼児期の発達過程について講義をする。保育者・教育者として発達を捉えておくことは適切な支援を考える上で重要なことである。

１．コミュニケーションの芽生え

人は生まれてすぐに他者へ関わりを求める社会的な存在である。したがってまだことばを発することのできない乳児期であっても、もちろん他者といろいろな方法で関わろうとしている。

子どもたちは生後１年という短い期間に驚くほどの発達をとげる。まず生後３、４か月ごろになると「人ー人」「人ーモノ」といった二項関係が見られるようになる。そして乳児は生後９か月を過ぎると、大人とモノの受け渡しを繰り返し楽しむようになる。このように１つの対象物を二者が共有しながら関わるようになることを三項関係という。この三項関係が成立すると子どもは大人が自分にどうしようとしているのか、また自分は他者に対してどうしたらよいのかというように他者の意図を理解できるようになる。モノの受け渡しといったやりとりが成立するのも、こういった他者の意図を理解し共有しているという背景があるからである。生後９か月ごろは二項関係から三項関係へと移行する時期である。

他者の意図理解の成立は生後９か月以降の乳児に現われる体系的な交互注視によっても説明できる。トマセロはこの時期を「９か月ミラクル」とよび、対人コミュニケーションが大きく変化する時期であると述べている。トマセロによれば、乳児は生後９か月になると、大人の見ている場所に注意を向け、新奇の人物や対象物に対して大人がどのように思っているのかを理解しようとするようになると考えられている。ま

たそれらに対して、大人がどのように対応するのかも見るようになるという。またトマセロは生後９か月の変化を文化的学習（cultural learning）の始まりとしている。乳児はこの文化的学習を生後９か月ごろから獲得し始め、人間の社会に適応してゆくのである。このように生後９か月という時期は社会性の発達とりわけ他者の意図を理解する・共有するということを獲得していく重要な時期なのである。

子ども達は大人のさまざまな働きかけに対して指さしや交互注視などを上手に使用して応答する。そして子どもからの自発的な働きかけも始まり、コミュニケーションがさらに展開していく。つまり、他者を意図的存在として理解し、そして他者と意図を共有するようになる。乳児は他者の意図と自己の意図を調整しながらコミュニケーションを展開する。子どものコミュニケーションがますます能動的になる。子どもの社会性発達の第一歩である（高橋，2008）。

２．乳児期の仲間関係

子どもはかなり早い時期から他児にも興味を示すようになる。まず生後２か月ごろになれば他児を見るという行為が始まる。３、４か月頃には他児に向かって手を伸ばす、他児に触ろうとする等の行為が出現する。生後６か月くらいではかなりの社会的な能力を持っており、相手のおもちゃを取るといった行動も見られるようになる。しかしながら２歳ぐらいまでは集団の仲間というよりも二者の仲間関係が優位であり、またおもちゃのようなモノの存在により逆に人とのやりとりが不可能になる場合も多く見られる。

Ⅲ．幼児期の発達

１．保育所・幼稚園における仲間関係

幼児期に入ると子どもたちは保育所や幼稚園で過ごす機会がでてくる。日本の５歳児の就学前教育（保育）の普及率は95％以上である。これはほとんどの子どもたちが小学校に就学する前に同年齢の集団生活を経験しているといってよいであろう。また親と過ごす時間が徐々に減少し、かわりに仲間と過ごす時間が徐々に増加していく時期でもある（Ellis, Rogoff, and Cromer, 1981）。

２．仲間関係の成り立ち

仲間（peer）とは、同じ興味・関心によって、共通の行動をとる同世代の他人のことをいう。幼児期になると、乳児期の大人と子どもの非対称の関係から子ども同士の対称的な関係へと移行していく。

私たちは仲間との関係をとおしてさまざまなことを学ぶ。とりわけ乳幼児期および児童期の仲間関係はこの時期の子どもの発達に多大な影響を及ぼし、また後の仲間関係および広く対人関係にも影響を及ぼすと考えられている。

３．社会参加の第一歩としての仲間関係

幼児期における社会的参加方略の発達的変化としてパーテン（Parten）の研究があげられる。パーテンは仲間との遊び形態の発達的変化に着目し、子どもが社会へ参加していくプロセスについて述べた。パーテンによるとまず遊んではいないが興味のあることを見る、自分の周囲をぶらぶらする「何もしていない行動（unoccupied behavior）」が出現する。その後は「傍観遊び（onlooker activity）」、「一人遊び（solitary play）」、「並行（平行）遊び(parallel play)」が出現する。さらに、集団内の興味や関心によって活動が行なわれ、全員で一緒の遊びが展開される「連合遊び(associate play)」、そして最も高度な組織化された遊びであり、役割や目標を持った「協同遊び(cooperative play)」といった遊びが展開される。このようにして子どもは仲間と遊ぶことをとおして社会の一員となっていくのである。

４．いざこざ

いざこざは遊びとは逆に否定的な行動（叩く、蹴る、壊す等）を伴うことが多く、一見すると困ったこととして捉えられることが多いが、子どもたちは仲間間のいざこざをとおしても多くのことを学ぶのである。

斉藤らによれば、幼児期のいざこざの原因は、１．物や場所等の占有に関するもの、２．非難や拒絶といった不快な働きかけによるもの、３．他児の行動や自己と他者の意図・意見のずれに関するものに大きく分けられる。物の占有に関するいざこざについては、どの年齢であっても比較的多く出現しており、一見するとどれも同じように見える。しかしながらその内容は発達的に異なっているのである。たとえば１、２歳児では他者の意図を理解することができずに、目の前にある物にのみ焦点が向き、結果として誰も使用していない物であっても他者が使用している物であっても同じように自分の意図のままに奪うということがおこる。これが年長の子どもになると、自己の要求が明確になるとともに他者に対する理解も明確になり、自分が使用したい物は他者が使っているがそれでも使用したいので奪うといった取る行動にいたるまでのプロセスが異なっているのである。また年齢が上がると奪い合うといった否定的行動で対応するいざこざだけではなく、非難する等のことばによるいざこざが増えてくる。

５．幼児期における仲間関係の役割

斉藤らは幼児期の子どもたちが仲間との遊びやいざこざをとおして以下のようなことを学ぶと述べている。まず他者の意図や情緒といったことに気づく「他者理解・共感」を学ぶ。次に年齢や性別、性格特性、社会的地位に関するカテゴリーなどの「社会的カテゴリーの理解」を与えてくれる。そして仲間との相互交渉のなかで集団生活を行なうための規則を理解するといった「社会的規則の理解」を学ぶ。また仲間との交渉は大人との交渉に比べより多くのスキルや知識が求められるため、「コミュニケーション能力」が高まる。最後に自分の思ったことをそのまま行動に移すのではなく、いったん抑えて客観的に外から捉えなおす「自己統制能力」を獲得する。

以上のように子ども達は保育所や幼稚園といった集団活動

の場をとおして多くのことを学び社会の一員となっていくのである。

６．仲間関係の持続性

幼児期の仲間関係は、あまり持続性がないと言われている。しかしながら３歳児であっても集団活動の場において、特定の相手のとの持続性のあるかかわりが可能であることが明らにされている。したがって、幼児期は「親友」関係とまではいかないかもしれないが、幼児期はまさにその親友関係を後に築くための基礎を培う重要な段階なのである。

しかし乳幼児期の社会的行動の発達にはエージェントとしての大人の存在がまだまだ必要である。エージェントとは子どもの社会的行動の発達のプロセスに影響を与える人々の集まりや制度のことをいうが、保育所や幼稚園における保育者は子どもが社会化していく際の重要なエージェントである。

７．現代のきょうだい関係の特徴

少子化が指摘されている中で、きょうだい関係についても少し触れておきたい。家族の中に第２子が誕生すると、第１子は「お兄ちゃん」「お姉ちゃん」としての誇りを持つようになる。また弟や妹をかわいいと思い、ミルクをあげようとしてみたりあやしてみたりと積極的に世話をするといった養護性も育つ。しかしながら一方で、第１子の母親への要求が増える、過度に母親に甘える、または指しゃぶりやおねしょといった行動が出現するといったいわゆる「赤ちゃんがえり」が見られることもある。第２子の誕生は第１子にとってとても喜ばしいことであると同時に大きな危機場面でもある。

また現代では、きょうだいを持たない子どもいわゆるひとりっ子の家庭が多く存在する。ひとりっ子はわがまま、協調性がない、友だちづきあいが下手だといったイメージを持たれやすい。それゆえ、大人とはうまく付き合うことができても、同年齢の子どもとはうまく付き合えないと考えられてしまう。しかし日本の子どもたちのほとんどは小学校就学前に幼稚園や保育所といった集団活動を経験している。少子化という現状において、幼稚園や保育所といった環境は、ひとりっ子であるための対人関係経験の少なさをカバーすることにつながるのではないだろうか。仲間関係ときょうだい関係との関連についてはあまり明確にされてきていない。故に今後の研究に期待したいところである。

Ⅳ．幼児理解の方法と PDCA サイクル

授業の中盤では、子どもたちの育ちや思いを正確に把握するために、幼児理解の方法について考える。それは、計画・実践・評価・改善・新たな計画という保育の営みの基礎に「幼児理解」があるからである。

１．「保育計画」と「幼児理解」

保育・幼児教育は、乳幼児の発達と地域の状況および保育所・幼稚園の方針・目標を把握した上で、保育・教育課程や指導計画を立案し、実践をしなければならない。とりわけ保育所においては、保育所保育指針が改定され、新たに保育課程の作成が求められるようになった。これは乳幼児の発達の連続性を踏まえた上で、入園から卒園まで一貫した保育支援をさらに充実させるように求められているのである。そして計画を立案するためには様々な方法で幼児を理解することが必要である。

２．幼児理解の方法―実践とともに―

第一に観察があげられる。保育・幼児教育における幼児理解の基本は観察することにある。目の前にいる子ども達が何を考え、何を思っているかということをまずは観察により明らかにしていくことが基本である。近年では、目で見る観察に加え、こビデオ等の映像を使用して観察する方法もある。映像として残すことで、他の保育者との情報交換も可能になる。ただし、映像の公表には個人情報保護等のことを踏まえ慎重にならなければならない。また記述するということもあげられる。児童票のような保育記録は幼児理解の大切な材料となる。また子どもについての理解だけではなく、自身の保育を省察するためにも記録は有効である。記録することで、自分の視点や不十分な点を整理することが可能となる。さらに保育者であれば当然関わるということもある。保育を計画し、実際に子ども達に関わってみることで、子ども達の変化に気づくことができる。ただし保育者自らが子どもに影響を与えているということを考慮して理解を進めていく必要がある。その他には発達検査等を使用して乳幼児、とりわけ障がいのある子どもを理解することも重要な視点である。発達検査は保育者が直接実施するということは少ないかも知れない。しかし、検査によって得られた情報をもとに保育をすすめるのであるから、どのような内容の検査であるか、得られた結果が何を示しているのかということについては十分な理解が必要である。

幼児理解の方法は１つだけではない。いろいろな側面から多角的に捉えることで初めて一人の子どもの姿が見えてくるのである。

３．保育の評価

最後に実践をしたのであればそれを評価しなければならない。いわゆる PDCA サイクルといわれる一連の流れであるが、保育・幼児教育は計画・実践・評価そして次の実践につなげることで、日々の保育・幼児教育の営みが生まれるのである。評価をすることが、自分の保育・教育を語ることそして誇りを持って自分の保育・教育を公表することにつながる。また計画・実践・評価のどれを取ってもそこには目の前の子どもの発達への理解が前提になければならない。

Ⅴ．地域における保育・幼児教育と乳幼児の発達

授業の後半では、保護者や地域への支援および保育者間の連携について考える。

１．保護者支援・地域支援

保育者は子ども達を保育するだけではなく、その保護者を支援することも大切な役割である。今日では「家庭」のスタイルが多様化してきている。また家庭での子育て力の低下も指摘されている。要因はいろいろと考えられるが、大事なことは要因を明らかにすることだけではなく、保護者の納得のいく支援がいかにできるかということである。これは、決して保護者の要求に全て応えるということではない。時には保護者の要求は子どもたちにとってみればプラスとはならないこともあるかもしれない。そのような時こそ、保護者とよく話し合い、互いに納得のいく解決策を選択していきたいものである。保護者支援は子どもへの支援よりも難しいことなのかもしれない。しかし子どもに寄り添うように保護者にも寄り添うことが必要とされている。そしてその中心には「子どもの姿」があることを忘れてはならない。

また今日の保育所および幼稚園の役割として、入所（入園）している子どもたちだけではなく地域の子どもたちとその保護者への支援も求められている。地域の実情や地域における子どもの生活を理解することも、乳幼児を保育する上で重要な視点である。

２．保育者間の連携

幼児やその保護者を支援する際には、保育者への支援についても同時に考えることが重要である。保育所および幼稚園の業務は年々増加している。このような状況においては、保育者間の連携が必要不可欠となる。例えば、クラスの保育運営は担任保育者が中心となって展開されなければならない。しかしながらそれは全ての責任を担任保育者が負うということでは決してない。担任の保育者が全てを一人で抱え込むことで、孤立してしまう可能性もある。所長（園長）、主任そして担任保育者の保育所・幼稚園内での役割はそれぞれ異なったものである。その異なった役割によって担任の保育者をフォローできるような組織的な連携をとることがとても重要である。またクラス間においては、「他のクラスのことはよくわからない」ということもあってはならない。職場内研修やカンファレンス等をとおして、自分の働いている職場が何を求められていて、何を実施しているのかをきちんと把握しておかなければ、目の前の子どもを支援することにはならないのである。

Ⅵ. 最後に

１．地域学部における保育士養成とは

最後に地域学部では保育士を養成している。「人間関係の保育」を受講する学生も保育士を目指している者が多い。そこで、地域学部における保育士養成のあり方についても触れておきたい。

四年制大学における保育士養成は、近年増加傾向にあるが、指定保育士養成施設全体の約35％と決して多いとは言えない。さらに国立大学法人は養成施設全体の５％にも満たない。平成21年５月31日現在では、全国保育士養成協議会に加入している指定保育士養成施設の校種は四年制大学が165校、短期大学が233校、その他施設が76校である（国立大学法人の指定保育士養成施設は17校である、うち協議会に加入している大学は10校である）（全国保育士養成協議会総会資料, 2009）。そのような中、鳥取大学地域学部では平成17年度４月より保育士養成（定員10名）が開始され、平成21年度３月に第１期の卒業生を送り、鳥取大学地域学部初の保育士が誕生した（奥野・高橋，2010）。

昨年度は第２期生も保育士として現場へ巣立っていった。卒業生が保育士として就職をしていくことは鳥取大学の保育士養成における素晴らしい成果であるといえる。

２．知と実践の融合

「人間関係の保育」で学んだ理論を、保育実習や教育実習といった実践をとおして、再確認し自分のものとして学び取って欲しい。子ども達は生まれてから５～６年の間に劇的な発達を遂げる。その発達は大人になるための重要なプロセスの一部である。このような重要な時期を、子ども達に直接関わりながら見届けられるというのはとても素晴らしいことだと思う。またそのプロセスに周囲の大人が影響を与えているかもしれないと思うと、保育・幼児教育という営みの重要性と同時に責任の重大さを感じずにはいられない。子ども達の発達が豊かなものとなるように、私自身も日々学び続けたいと思っている。さらに「人間関係の保育」で学び実習を経験することで、知と実践の両輪が揃うと考える。その両輪を統合させる場として「人間関係の保育特論（３年次後期）」を設けている。鳥取大学で保育・幼児教育を学び、保育者として卒業するのであれば、即戦力としてそれぞれの地域で活躍できるよう、４年間の学生生活を充実させて欲しいと思う。

文献

１．Ellis,S.,Rogoff, B., and Cromer, C., C. Age segregation in social interactions. Developmental Psychology, 17, 399-407,1981.

２．奥野隆一・高橋千枝，国立大学法人における保育士養成の取り組み－鳥取大学地域学部における成果と課題，地域教育学研究，p. 7-13, 2010.

３．高橋千枝，乳幼児期のコミュニケージョン・スキルの検討，岡本依子・菅野幸恵編，親と子の発達心理学，新曜社，2008.

４．高橋千枝，仲間関係・きょうだい関係，本郷一夫編，シードブック発達心理学－保育・教育に活かす子どもの理解－，建帛社，2007.

５．厚生労働省，保育所保育指針，2008.

６．全国保育士養成協議会「会員の状況」，平成21年度総会資料，2009.

７．文部科学省，幼稚園教育要領，2008.